

都市と農山村のネットワークの意義と課題

○千葉美佐子（NPO法人 幸まちづくり研究会代表）

KEY WORDS:協働で環境再生、市民の自己実現、社会的自己実現、都市と水源の森をつなぐ、体験型環境教育活動

1. 水源の森と都市との関係性と課題

山や森の自然が、豊かな「水」や「生態系」を育んでいる。木は光合成をおこない、二酸化炭素を吸収し、酸素を排出し、炭素を固定する。人間が適切な時期に適切な量の伐採、植林、枝払い等の手入れをおこなうことで、森の木々に一定の風と光が確保され光合成が盛んにおこなわれ森は活性化する。そして活性化された森の落葉によって土を肥やし豊かな「水」を育む土壌が形成される。それが「いのち（水源）の森」の健全な状態であり、機能である。

しかし、昔から森の恵みを活かし、自然と共生してきた暮らしが、近代の文明によりその自然との関係が大きく崩れ、「植えて、育てて、収穫して、上手に使う、また植える」という「森づくりの循環」が途切れてしまった。

また、林業に携わる人や山村に住む人も減り、手入れが行き届かなくなり放置されたままの里山の雑木林や自然林は、凄まじい勢いで荒廃がすすんでいる。

このままでは私たちの子孫が安心して「水」を飲むことも、暮らすこともできなくなってしまう。

水源の森を健全にするためには、人が積極的に関わり、育てなければならない。水源の森の荒廃は、森からの恵みを受け、暮らしの中で多くの二酸化炭素を排出している都市で暮らす私たちの問題でもある。

守り育むべき山が今どうなっているのかを知り、水源の森と私たちの暮らしとの関わりについて考え、水源地域の農山村の人々との交流を深めながら、次世代へつなげる「いのちの森」づくりに取り組んでいくことが課題である。

2. 都市の環境再生を基底に多面的ネットワークの構築

■「市民による自己実現」

神奈川県川崎市幸区の真ん中に位置し街を東西に分断してきた新鶴見操車場の跡地利用に対し、市民主体で「未来を考える歴史調査」や地区カルテの作成を行い、自分がこのまちで「どう暮らしたいか」、「どんな街にしたいか」を出し合い、そのひとり一人の想いが繋って、持続可能な社会環境をつくる「幸せの森」市民構想を提案した。操車場跡地が市民による自己実現の場となり、自らが実践しながら、その提案の“まち”をつくっている。

■ランドワーク型の活動

体験型環境教育活動「アグリガーデン（体験農園）」や子どもたちが「ふるさと」と思える「都市に森を創る」活動は住民主体によって地域に根付いている。その活動の特徴は、総合的な視点をもって、市民、地域の環境団体、保育園、小学校、福祉団体、地元企業や労働者、行政等との協働で取り組んできたことにある。

■「社会的自己実現」の創出のための多様な企画

その実践活動から、「農」の多面的価値の創出や何もなかった都市の空間の中に「里山」を創出することができた。このような操車場跡地での環境再生の活動を基底に、これまでにつながった団体や新たに水源地域のNPOや自治体等と連携を深めるため、「創ろう！ふるさとの森・守ろう！水源の森」をテーマに2005年から毎年1回、ネイチャーフェスティバルを開催してきた。このイベントが継続的に開催できた要因は、当法人と森林NPOとの共催、神奈川県

との協働事業で流域の行政や地元企業、労働組合の後援・協賛が得られたこと、協賛団体のJR貨物労組・東洋大学公認サークル「アカシアの木」等と実行委員会を形成して企画・運営できたことにある。「木を使うことは森を守ること」の広報啓発やドングリポット苗づくり、家庭でドングリ苗木を育ててくれるサポーターの募集等の多様な企画によって、都市住民に水源の森への関心と理解を深めることができた。

5年間のイベントで深めた「関係性」をさらに発展させ2009年からは、小学校と連携した「ドングリ教室」や一般市民（親子）を対象の体験型環境教育「ドングリ学校」を実施。都市の子どもたちや他世代の都市住民の手によって、苗木の育成から植樹、植樹後の森林整備、里山体験、成長した都市の里山の観察会や植生調査等、多様な企画を展開している。

3. 都市と農山村のネットワークの意義と課題

■「いのち（水源）の森 “の価値認識を深めた

命を吹き込み育てたドングリの苗木を水源の森にかえし、植樹後も山や森、水源地域との交流を深めながら、森の役割や森と人との関わりについて体感的に学ぶ「ドングリ学校」の開催が可能となった。そのことによって都市住民の「生命」と生活に欠かせない「水」を育む「いのち（水源）の森」の価値認識を深めた。

■協働による持続可能な生命創造型「幸せ」づくり

「生命」と「水」を育む豊かな森を次世代につなぐ活動は、操車場跡地を「森」への入り口拠点として「いのちのつながり」について考え、実践を通して「いのちを見つめ・いのちを育み・いのちを繋ぐ」ことであり、持続可能な生命創造型の「幸せ」づくりと言える。

■「継続性」のある活動へ

ドングリのサポーターのニーズ調査から、森林整備活動や植樹後の成長観察会への参加ニーズが高かった。水源の森に関心を持って継続して参加機会の提供を行うための企画立案が課題である。また、サポーターが個人的にも水源地域との交流を深められるよう、開催される体験イベントや祭り等の地域情報についても情報発信していくことが必要だ。

■「信頼関係」を築きツーリズムへと発展

森林NPOの担当者とはイベントを通して関係を深めてきたが、山主や水源地域の人々との信頼を深めることが課題である。この事業を実施するにあたり森林NPOからの協働の条件が、植樹だけでなく森林整備活動への参加だった。年3回「オオムラサキが棲める里山再生」の「お助け隊」として、荒れた竹林の伐採と植樹用の支柱づくり、植樹後の下草刈り等の活動に参加し3年目になる。実践活動を通して一過性ではなく、継続して“いのちの森づくり”をとともに推進していく考えであることの理解が深まった。

■「木を使って森を育てる」流域材の活用促進

都市に暮らす私たちにできることは、伐採した「木」を使って森を育てることです。当法人が水源地域との懸け橋になって、水源の森の「木」を使ったマンションリフォームの事例づくりやオンリーワンの机やテーブルづくりが可能となった。都市住民にとっても森の恵みで「心」と「体」も元気になる「木と暮らす生活」を提案し、伐採見学会やイベントで相談できるよう、水源地域とのコーディネートが課題である。